

羅臼岳登山道ヒグマ人身事故の概要

2025 年 9 月

知床ヒグマ対策連絡会議

目次

1	事故の概要（事実情報）	1
1.1	本件事故の概要	1
1.2	捜索救助および関係機関の対応経過	1
2	事故調査と分析	6
2.1	事故発生現場	7
2.2	事故の経過と事故調査	13
2.3	捕獲個体の情報および加害個体との関係性	18
2.4	事故発生以前に確認された要注意事例とその対応	20
2.5	登山道等を対象とした情報提供・管理活動の実施状況	21
3	参考資料（基礎的情報）	23
3.1	羅臼岳と登山道の概要	23
3.2	利用の現況	24
3.3	ヒグマの現況	24
3.4	管理の現況	27

1 事故の概要(事実情報)

1.1 本件事故の概要

2025 年 8 月 14 日 11 時ごろ 羅臼岳登山道（岩尾別コース）を下山中の登山グループ（2 名パーティ）のうち 1 名（以下、被害者という。20 歳代、男性）がヒグマに襲われたとの通報が警察に入る。通報者は、被害者の同行者。知床連山登山道全線を閉鎖とし、同日より警察を中心とした捜索救助活動を開始。

翌 8 月 15 日の捜索活動において、登山道近傍の林内で被害者に接触している 0 歳 2 頭連れ親子のヒグマを発見（計 3 頭、捕獲個体という）。その場でヒグマ 3 頭を銃により捕殺。被害者は、その後、病院に搬送され死亡が確認された。

1.2 捜索救助および関係機関の対応経過

本節では、事故発生の通報を受けてから斜里町による事故対策本部解散までの関係機関等の動静を時系列で整理する。

8 月 14 日（木）

- 11:10 被害者の同行者が、警察へのヒグマによる人身事故発生の 110 番通報。
- 11:20 警察から知床財団に事故発生の連絡が入る。
（各関係機関も順次事故発生を把握）
- 11:30 斜里町役場が「8.14 羅臼岳におけるヒグマ人身事故斜里町対策本部（以下、斜里町対策本部）」を設置。猟友会へ協力要請。
鳥獣保護区管理センターを現地本部とし、斜里町対策本部と常時連絡体制を構築。
- 12:05～ 残存登山者救助等のため、道警ヘリ 3 機、防災ヘリ 1 機が順次出動。
事故発生のニュース速報が報道。
岩尾別温泉登山口に関係機関職員が順次集合。
- 13:00 頃 ヘリによる救助活動開始。
- 13:08 臨時のヘリポートとするため知床五湖を臨時閉園。
- 13:15 頃 同時刻までに知床連山のすべての登山口を緊急閉鎖。
- 13:28 道警ヘリが残存登山者の救助（ホイスト）開始。
以降、残存登山者をウトロ学校グラウンドと知床五湖（当初は道道分岐）にヘリでピストン搬送。
- 13:40 関係機関の連絡調整を図るため、関係機関の連絡官（以下、リエゾン）が斜里町対策本部に派遣。
- 13:59 地上からの捜索救助のため、岩尾別温泉登山口へ知床財団職員（5 名後に 2 名追加）・猟友会員（3 名）が移動。14:22 登山口到着後待機。

14:10 防災ヘリが現地に到着。

14:20 カムイワッカ湯の滝の利用中止を決定。

14:30 頃 ヘリ 3 機体制で残存登山者の救助活動が継続。下山する登山者はオホーツク展望に集合・待機し、順次救助されている状況。
ウトロ学校にヘリ搬送された登山者は、ウトロ支所（漁村センター）に送られ、事情聴取を受けた後に登山口へ搬送。知床五湖にヘリ搬送された登山者は、知床五湖フィールドハウスで事情聴取を受けた後に登山口に搬送された。

14:50 岩尾別温泉登山口に道警山岳救助隊到着。知床財団職員、猟友会員と合流し、地上からの捜索救助隊を組織。2 次被害防止のため、ヘリによる残存登山者の救助活動が終了するまでは登山口に待機との指示。

15:52 15:32 時点で、救助済み人数累計 25 名、救助中 8 名、オホーツク展望に残存登山者 29 名との情報。

15:54 斜里町 web サイトで事故情報の第 1 報を発出。

16:51 斜里町対策本部が緊急エリアメール配信。

17:00 頃 待機中の捜索救助隊は本日の出動断念を決定。翌日の計画協議。
救助活動優先のため知床五湖、カムイワッカ湯の滝の 15 日の閉鎖を決定。シャトルバスも運休。

17:04 16:26 時点でオホーツク展望に残存登山者 19 名が救助待ちとの情報。

17:18 17:17 時点でオホーツク展望に残存登山者 3 名が救助待ちとの情報。
縦走利用や宿泊利用者が山中に残っている可能性があるため、道警山岳救助隊を羅臼平にヘリ搬送することを協議。

17:19 残存登山者残り 6 名との情報（一部は自力で下山）。

17:40 防災ヘリによる残存登山者の救助が完了。丘珠空港に帰投。

17:58 道警ヘリで残存登山者 3 名を収容。残存登山者の救助活動完了。
救助人数合計 71 名との報告（道警ヘリ 56 名、防災ヘリ 15 名）。

18:07 岩尾別温泉登山口の関係機関リエゾン、救急隊など順次撤収。

18:14 道警ヘリ羅臼岳上空から登山道を確認したが、残存登山者なし。羅臼平付近は雲が厚く宿泊者の確認はできなかった。

18:15 明朝 5 時に捜索救助隊集合を確認。

18:54 岩尾別温泉登山口から関係者の撤収完了。

20:00 斜里町 web サイトで事故情報の第 2 報を発出。

21:15 北海道ヒグマ注意報発出。

22:00 現地本部同日の活動終了。

8月15日（金）

- 5:00 岩尾別温泉登山口に捜索救助隊集合。構成は道警 10 名（山岳遭難救助隊 8 名、ハンドラー 2 名、警察犬 2 頭）、猟友会ハンター 3 名、知床財団職員 5 名（うち 2 名はハンター）の計 18 名
関係機関リエゾンも岩尾別温泉登山口に順次集合。
- 5:30 捜索救助隊活動開始。天候は少雨。風あり。
- 6:10 標高 400m 地点に到達。登山口から警察が調査用のドローンを飛ばすが、強風のため使用できず。雨やむ。
- 7:18 オホーツク展望に到着。同地点から熱源カメラ付きドローンを飛行させ 560m 岩峰地点までの登山道及び南西側林内を調査。熱反応なし。
- 7:45 560m 岩峰通過。さらに上部に前進。
- 8:00 硫黄山登山口に下山する登山者対応に備え、カムイワッカに職員配置。
- 8:20 ヘリが羅臼平へ飛行し残存登山者の対応を計画するが強風により困難との連絡。
- 8:45 標高 610m の登山道上に立ち入り禁止の規制線を設置。
- 9:16 強風のため現場でのドローンによる捜索を断念。最大風速 20m/s 程度。人的捜索を開始。捜索救助隊は先行隊（6 名）を編成し、560m 岩峰付近の捜索に着手。警察犬を含めた残りの隊員は 560m 岩峰基部で待機。
- 9:28 登山道直下の斜面にて被害者・同行者の所持品と思われる物を発見。捜索場所の絞り込みに成功。
- 9:33 本格的な捜索のため、先行隊（6 名）に 6 名が加わり 12 名（本隊とする）で登山道外の捜索を開始。残る 6 名（分隊とする）は 560m 岩峰基部で待機。
- 9:37 林内に点在する被害者の着衣・所持品などを発見・回収しながら斜面下部を捜索。10:15 の所持品発見を最後に痕跡がなくなり、捜索範囲を拡大。
- 10:45 道警ヘリが知床五湖駐車場に着陸。羅臼平には、雲がかかっており近づけず、残存登山者対応は困難と判断し待機。
- 10:50 560m 岩峰基部に待機していた分隊は下山開始。
- 11:30 宿泊利用等による登山者が山中に数組いることを確認。各登山口の駐車車両等の照合を実施。
- 12:00 警察犬を含む分隊が岩尾別温泉登山口に下山。斜里町 web サイトで事故情報の第 3 報を发出。
- 12:12 被害者の登山リュックを発見。痕跡等から再度捜索範囲の絞り込みに成功。
- 12:25 硫黄山登山口に下山した登山パーティー（4 名）を自然センターに搬送。

- 12:39 被害者の所持品・着衣等を回収しながら斜面下部を搜索。
- 13:05 被害者に接触している2頭の子を連れた親子ヒグマを発見。捕獲体制に移行。
- 13:06 母グマに発砲。子グマ2頭は逃走。その場で待機。
- 13:30 戻ってきた子グマ2頭に発砲。全3頭の死亡を確認。
- 13:33 ヒグマの捕獲場所付近で被害者を発見。
- 14:40 被害者をヘリに収容。その後、病院に搬送。
- 15:17 被害者の死亡を確認。
- 15:28～15:45
捕獲したヒグマをヘリでピックアップ（ホイスト）し、知床五湖経由で鳥獣保護区管理センターに搬出。計2便で搬出完了。
- 15:49 搜索救助隊（本隊）が下山開始。
- 16:17 捕獲したヒグマ3頭の計測および解体と試料採取を実施。
- 16:30 五湖・カムイワッカ・各登山道について翌16日の閉鎖継続を確認。
- 17:15 搜索救助隊（本隊）が岩尾別温泉登山口に下山。解散。
現地リエゾンも順次撤収。
- 18:00 斜里町 web サイトで事故情報の第4報を発出。

8月16日（土）

- 硫黄山登山口に下山する登山者対応に備え、カムイワッカに斜里町により人員配置。
下山者は確認できず。
- 北海道の依頼を受け、北海道総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所（以下、道総研という。）の研究員（2名）が事故調査を実施（終日）。被害者の同行者、斜里警察、知床財団等への聞き取り調査を実施。併せてクマのDNA分析用の試料を遺留品等から回収。
- 当面の登山道の閉鎖継続を確認。登山口の掲示等の確認、パトロールの実施。

8月17日（日）

- 知床五湖の高架木道の利用再開（地上遊歩道は閉鎖継続）。
- カムイワッカ湯の滝のぼりの利用再開。シャトルバス運行。

8月18日（月）

- 知床五湖地上遊歩道の利用再開。

8月19日（火）

- 北海道庁より道総研によるDNA分析の結果をプレスリリース（詳細は2.3を参照）。

8月20日（水）

- 関係機関による現場検証（1回目）の実施（詳細は2章を参照）。

8月21日（木）

17:00 斜里町対策本部廃止。

2 事故調査と分析

本章では、本件事故の本件事故の発生以降に実施した事故調査の結果を示し、その分析を行う。事故調査の実施概要を表 2-1 に示す。

表 2-1 事故調査の実施概要

月日	目的および実施概要	実施者
8月15日	・ 搜索救助活動と併せた遺留品の回収 ・ 捕獲個体の解剖およびサンプリング	北海道警察 知床財団
8月16日	・ 同行者および搜索救助隊、北海道警察担当者への聞き取り調査 ・ 遺留品からのサンプリング	道総研
8月20日	・ 事故の現場検証、事故発生地点の特定 ・ 遺留品の搜索、ヒグマ痕跡の搜索	環境省、北海道、斜里町 羅臼町、標津町、知床財団 北海道警察
9月3日	・ 事故の現場の検証、搜索救助活動の現場確認 ・ 遺留品の搜索	環境省、知床財団 道総研



写真 2-1 事故調査の実施風景(9月3日)

＊ 道総研による調査やDNA分析は、北海道からの依頼により実施

2.1 事故発生現場

2.1.1 事故発生の時刻と場所

事故発生日時

2025 年 8 月 14 日 午前 11 時 00 分頃（精度±10 分）

事故発生場所

登山コース上の位置：羅臼岳登山道（岩尾別コース）上の通称 560m 岩峰付近であり、登山口となる岩尾別温泉から約 1,400m の距離で、1 時間程度の所要時間である（図 2-1）。

住所：北海道斜里郡斜里町遠音別村

緯度経度：北緯 44.103733° 東経 145.097905°

標高：559m

保護区等指定

知床世界自然遺産地域 A 地区

知床森林生態系保護地域 保存地区

知床国立公園 第 2 種特別地域（保護規制計画）、羅臼岳登山線道路（歩道）（利用施設計画）

国指定知床鳥獣保護区

2.1.2 事故発生前後の天候

事故発生地点からおおよそ 2.5km 離れた知床五湖（標高 230m）に設置された気象観測機の記録データによると、11 時ごろの気温は 27.0 度で雨量はゼロ。風速（10 分平均）は 1.0m/s 以下であった。照度は約 90,000lx であり晴天に近い水準であった（図 2-2）。

これらのデータから現場付近の天候は晴れまたは薄曇りで降雨などはなく、視界も良好であり、行動に支障のあるような風もなかったものと推定される。

なお、当日は 11 時ごろから天気が悪化傾向に転じており、同じく知床五湖のデータによれば午後 1 時以降の平均風速は 3m/s 前後で午後 2 時 45 分には最大瞬間風速 11.4m/s を記録している。また、午後 8 時には少雨も観測されている。



図 2-1 羅臼岳登山道(岩尾別コース)の概要と本件事故の発生地点
知床連山エリア MAP(知床財団発行)を使用

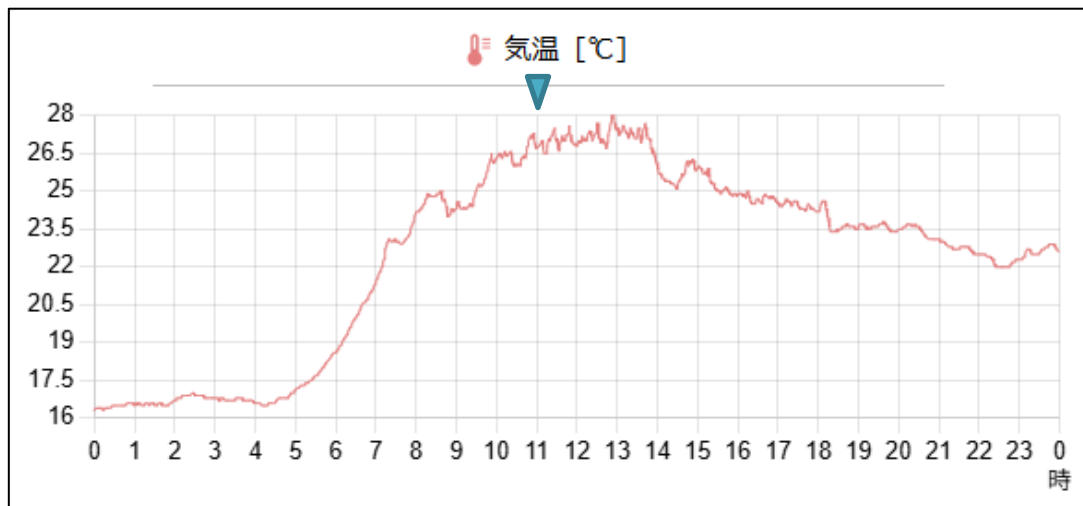
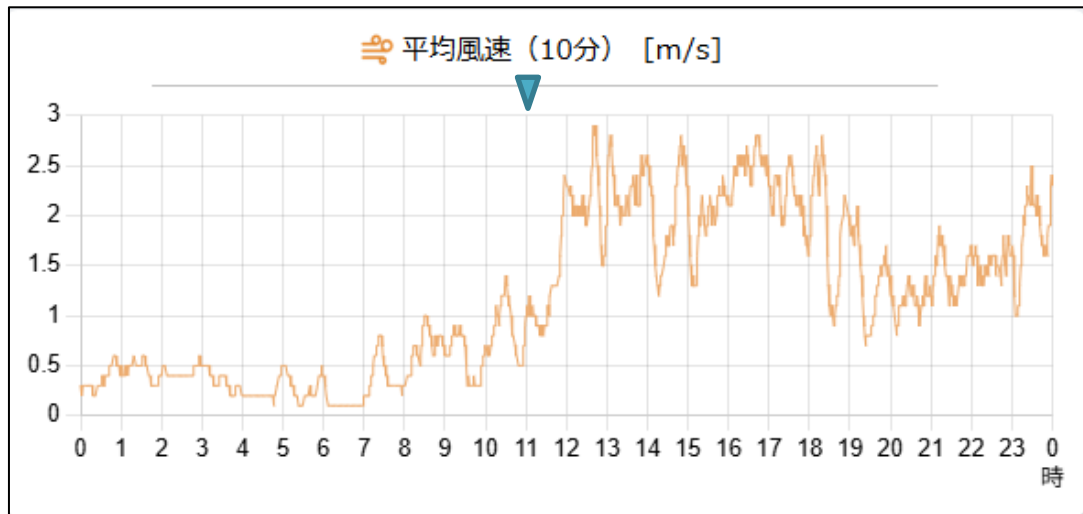


図 2-2 知床五湖における気象観測データ(8月14日の24時間データ)

2.1.3 事故発生地点の環境(図 2-3)

本件事故の発生地点は、事故調査によりほぼ正確に確定した。山頂側から登山口に向かって進むと(下山方向、以下の説明も同様)560m 岩峰の基部にぶつかり、小広場となっている。ここから登山道は岩峰の南側を巻くように配置されており、45m の直線区間を経て右側にゆるくカーブしている。このカーブの先で被害者は加害個体と遭遇したと推定される。

この区間はほぼ平坦であり、幅員は約 110 cm と狭い。左側は急峻な谷で直下の傾斜は 40 度程度であり、その下部も平均 30 度程度の傾斜が続く。林内はハイマツやダケカンバなどが密生しており見通しは効かないが、下層植生は薄く林床は見えている場所が多い。右側は岩壁が迫っているが、低木類が覆いかぶさるように生育しており視認できない。

560m 岩峰付近は、夏季にはヒグマのエサとなるアリが恒常的に発生する場所である。アリの摂食を目的としたヒグマの出没が多発する場所として知られており、事故発生地点を横切る獣道を確認した。なお、8 月 15 日の現地搜索時、および 8 月 20 日の事故調査時においても多量のアリの発生を確認している。

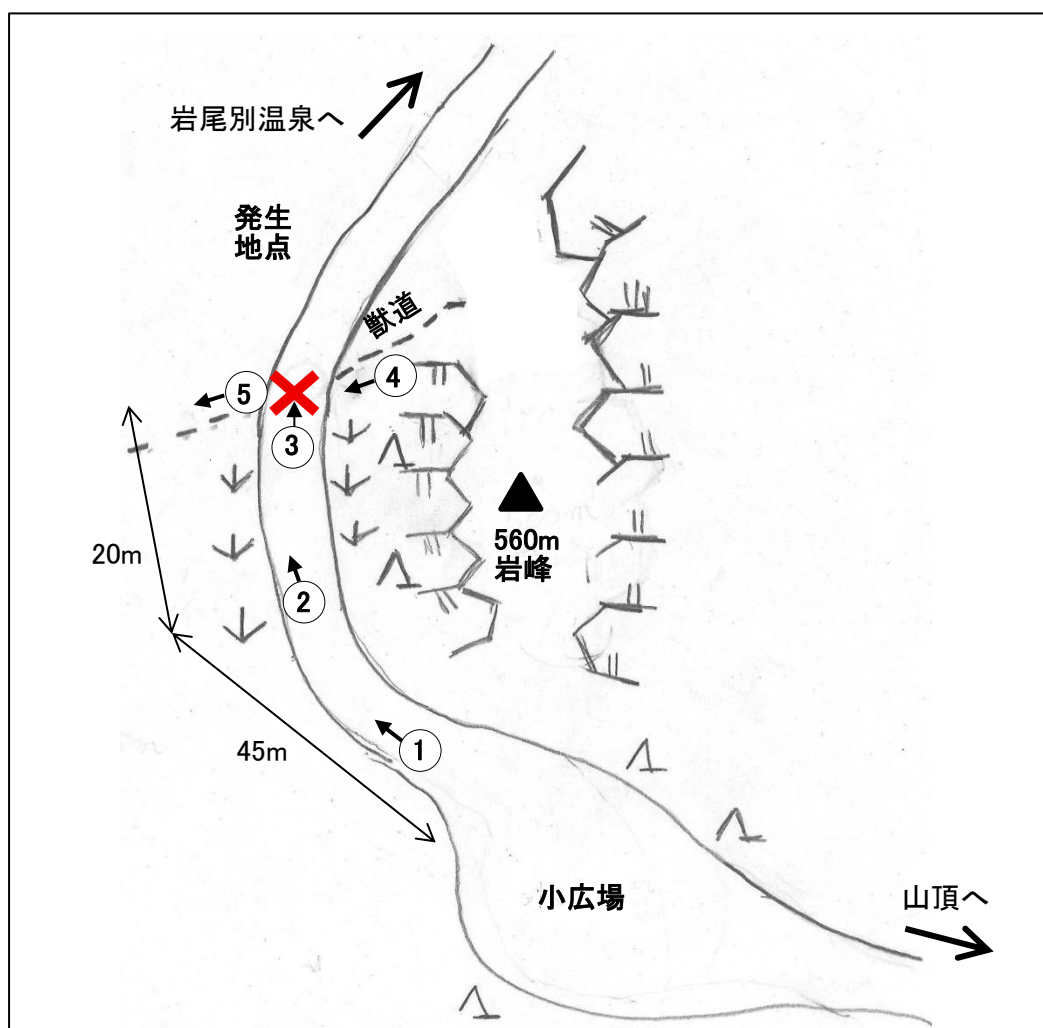
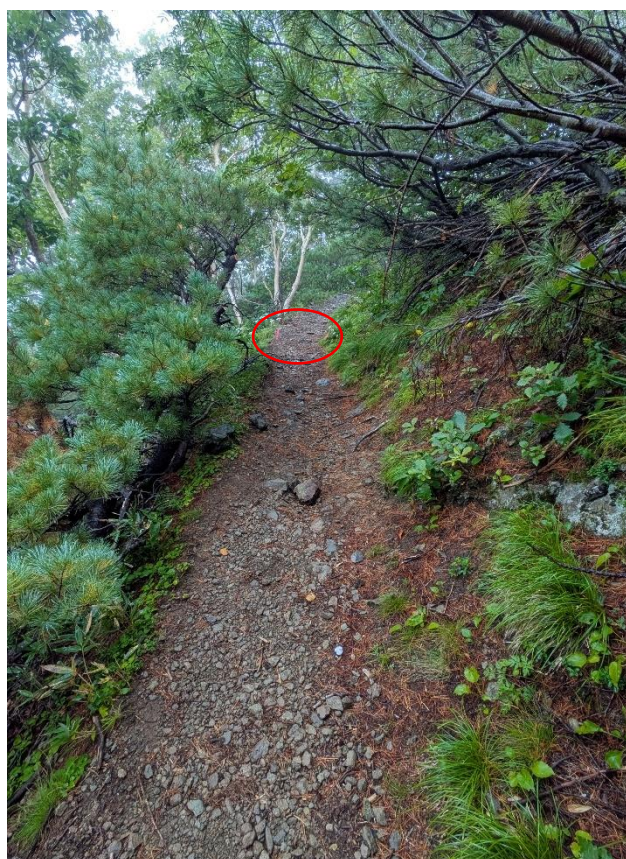


図 2-3 事故発生現場見取り図。図中の番号は次頁の写真番号に対応する。矢印は撮影方向を示す。



写真①小広場から事故発生地点方向。右側にゆるくカーブしており、発生地点は見えない。



写真② 事故現場より15m~20m 山頂側。
発生地点を見通すことができる(赤丸)。



写真③ 事故発生地点。歩道を横断するように獣道(白線)がある。



写真④ 獣道から登山道を見下ろす



写真⑤ 事故発生地点から谷側を見下ろす。低木によりまったく見通せない。

2.2 事故の経過と事故調査

聞き取り調査や現地調査の結果から事故発生後の重要情報を以下にまとめる。事故経過と事故調査に関わる位置情報を図 2-4 に示した。

2.2.1 事故発生時

- 事故発生時、被害者の近くに同行者および第三者はおらず、事故時の被害者の行動およびヒグマによる被害者への攻撃の瞬間は誰も直接目撃していない(図 2-4 a 地点)。
- 被害者は同行者から離れ、200m 程度先行していた。同行者の位置は図 2-4 の b 地点と推定されるが確度は低い。事故発生時、被害者は単独で走って移動していた可能性が高い。移動速度などは不詳であるが、登山全体の行程から類推してもかなり早いペースで下山していたことは確かである。
- なお、早いペースを意識し「走れるところは走る」といった行動をしていたが、いわゆる「トレイルランニング」と呼ばれるスタイルを志向した登山ではない。
- 被害者はクマ鈴を携行していた。クマスプレーの携行は不明である。その後の調査においても所持や使用に関する情報はなく、所持していなかった可能性が高い。

2.2.2 事故発生後

- 同行者は、被害者の助けを呼ぶ声で事故の発生を知覚し、登山道から外れて林内斜面を下り、ヒグマに襲われている被害者を林内に発見した(図 2-4 c 地点)。この際、同行者が確認したヒグマは 1 頭との情報である。
- 同行者は応戦と救助を試みたが、ヒグマは被害者から離れなかったため、携帯電話の通じる登山道上に移動し、警察へ通報を行った(通報時間 11:10)。
- 同行者は強力催涙スプレー(現段階でヒグマに対応したものであったかは不明)を所持していたが、使用履歴が不明のものだった。事故発生時の初期対応において使用を試みたが、噴射できていない。登山開始時にすでにほぼ空の状態だった可能性がある。
- 同行者はオホーツク展望で救助を待っている間に、登山道を下ってくるヒグマ 1 頭を目撃した(図 2-4 d 地点)。体サイズ等の情報から、この個体は加害個体と同一である可能性がある。

2.2.3 被害者の搜索救助活動と事故調査

8月15日

- 事故発生地点から谷側林内(図 2-4 e 区域、写真 2-2)を搜索し、被害者の所持品、着衣、ザックなどを発見し、回収した。
- 13 時 06 分頃、被害者に接触している 2 頭の子を連れた親子ヒグマを発見(図 2-4 f 地点、写真 2-3)。最初に母グマに発砲し捕獲。その後、ほぼ同地点で子グマ 2 頭に発砲し捕獲した。被害者は病院に搬送され、その後死亡が確認された。

- 捕殺したヒグマは現場から搬出され、同日中に計測および DNA 調査のためのサンプルリングを含む試料採取を行った。

8 月 20 日

- 事故調査を実施し、登山道上でのヒグマと被害者の遭遇地点を特定した。
- 事故発生地点付近の谷側林内でスマートフォンなどの遺留品やヒグマの体毛を追加で発見し回収した（図 2-4 g 地点）。

9 月 3 日

- 事故の現場検証を行った。事故現場の測量や捕獲現場等の確認を行った。
- 遺留品の搜索を行ったが成果はなかった。その後の聞き取りにより、想定される遺留品はすべて回収できていることを確認した。

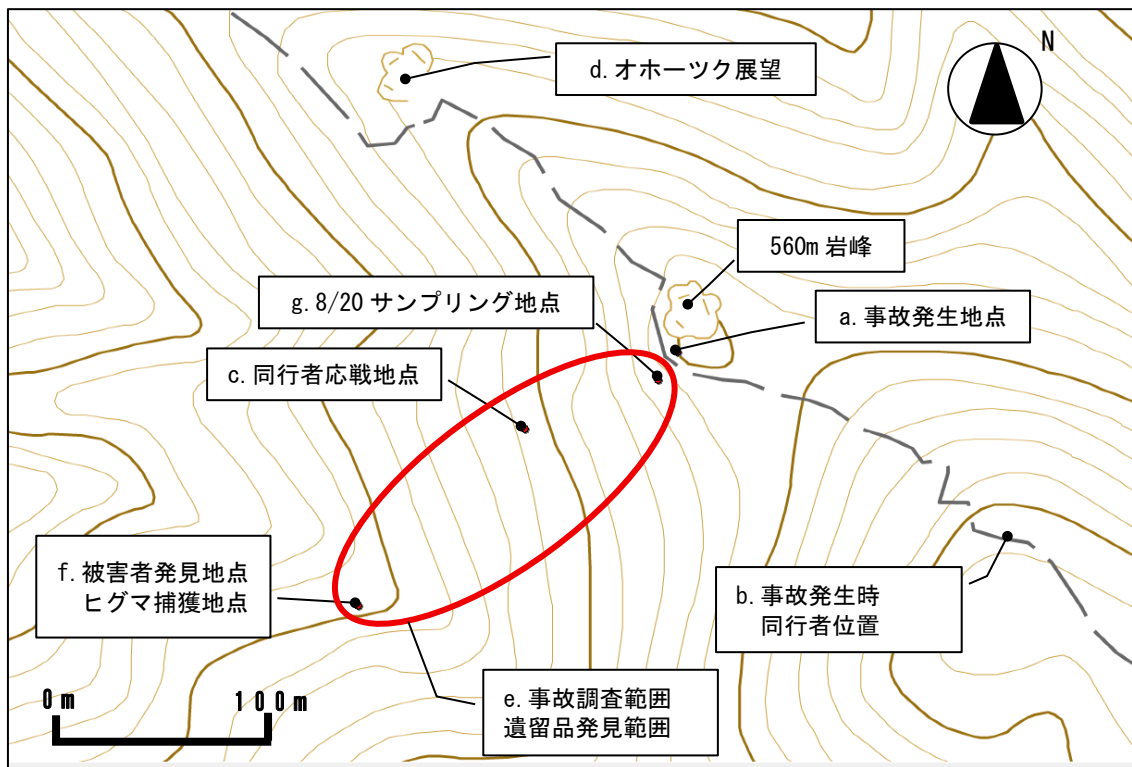


図 2-4 事故経過と事故調査に関わる位置図。ベース地図は国土地理院地図を使用した。



写真 2-2 搜索区域の様子(9/3 撮影)



写真 2-3 ヒグマの捕獲地点(9/3 撮影、赤丸で示す)

2.2.4 その他登山者の動向と救助活動

当日の登山利用の状況

- 当日の岩尾別コースの登山者数は正確には把握されていない。また、複数の登山口から延びる登山道が稜線で接続しており、宿泊による利用者もあるため、山中の登山者を正確に把握することは困難である。
- モニタリングを目的として岩尾別温泉登山口に設置された赤外線式のカウンターのデータ¹によると、8月14日の入山者数は63名である（速報値）。今年度7月から8月14日までの日別の入山者数を図2-5に示す。また、カウンターデータの分析から、同登山口における入山時間のピークは午前4時から5時、下山時間のピークは午後1時から3時との結果が得られている。

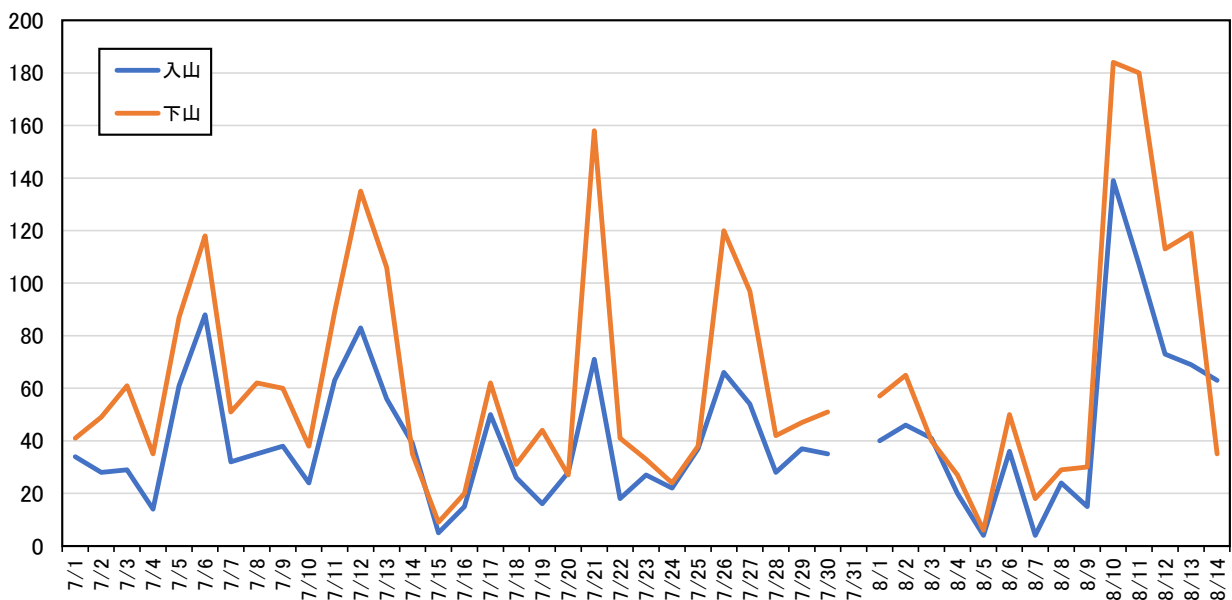


図 2-5 2025 年 7/1 から 8/14 までの岩尾別温泉登山口の入山者数

残存登山者の救助活動

- 2次被害の防止を主眼として、事故発生直後よりヘリコプター3機を用いた残存登山者の救助活動が警察と消防の連携により進められた。
- 事故発生時、同日の入山者の大多数は山中に滞在中であり、その大半は羅臼岳登頂後の下山中であつたと想定される。
- 被害者の同行者が通報後に救助を待っていたオホーツク展望（標高 490m）に次々と下山者がさしかかり、事故の発生を認知し、滞留することで事実上の救助（ホイス）地点になったものと推定される（写真 2-4）。

¹ 赤外線式カウンターは、機材特性により利用者が過少に算出されることがある。また、入山者数と下山者数に大きく開きがあるのは、機械的な不調の可能性がある。

- 同地点で滞留する登山者は、事故情報やヘリによる救助方針を口伝やメモで伝え合い、順番待ちをしていたことが報告されている。
- 結果的にヘリによる救助者は71名となり、活動終了時刻は日没時刻（18:27）間近の18:00 ごろだった。
- 救助地点と事故発生地点が近く、2次被害防止の観点から残存登山者の救助活動が終わるまで地上の搜索救助隊は待機となり、結果的に被害者の搜索救助活動は明朝から開始となった。



写真 2-4 ヘリによる救助地点となったオホーツク展望。ホイスト(吊り上げ)地点を赤丸で示す。撮影は 8/15。

2.3 捕獲個体の情報および加害個体との関係性

2.3.1 捕獲個体について

個体1

性別	メス、親	年齢	11 歳（現地のモニタリング記録から特定された出生年より算出）		
体重	117.4kg	体長	140.0 cm	標識等	なし
その他	モニタリングのための識別記号 ² ：SH 特徴的な胸部斑紋があり、観察による識別が容易なため、モニタリング記録が豊富。				

個体2

性別	メス、子	年齢	0 歳（外見からの推定）		
体重	17.3kg	体長	72.0 cm	標識等	なし
その他					

個体3

性別	オス、子	年齢	0 歳（外見からの推定）		
体重	17.0kg	体長	72.5 cm	標識等	なし
その他					

2.3.2 捕獲個体と加害個体の関係

- 捕獲個体と本件事故との関係を分析するため、道からの依頼を受けた道総研 DNA 分析を実施。被害者の着衣および遺留品等に付着したヒグマの体毛や唾液から抽出した DNA と、捕獲個体（親個体）の肝臓から抽出した DNA が一致した（8 月 19 日北海道庁プレスリリース）。
- 8 月 20 日に実施した現地調査において事故発生地点付近で未回収であった遺留品のほか遺留品に付着したヒグマの体毛およびその直近で発見されたヒグマの体毛を回収した（図 2-4 g 地点）。回収したヒグマの毛と、遺留品から採取した唾液を試料として追加的に DNA 分析を実施した結果、捕獲個体（親個体）の DNA と一致した。
- 事故調査において実施された一連の DNA 分析において、捕獲個体以外のヒグマの DNA は検出されていない。搜索救助、現場検証等の事故調査においても、捕獲個体以外のヒグマが本件事故に関与した情報は得られていない。

² 調査や管理のため、識別されたヒグマには識別記号（ID）が付与される場合がある。調査の主体や目的により識別記号の整理方法は異なる。同一個体が複数の識別記号を有することもある。

2.3.3 捕獲個体の識別と履歴

捕獲個体の DNA 情報と外見的特徴から個体の識別を実施した。知床財団によるヒグマ対策記録や研究機関によるヒグマ DNA 調査等により把握している個体識別情報と捕獲個体の情報を突合した結果、以下のことが明らかとなった。

- 捕獲個体は、2014 年（出生年）から知床国立公園で毎年のように目撃されてきた。特に、岩尾別地区を中心に活動しており、今年度も 5 月頃から同地区を中心に目撃されており、2 頭の出生も確認されていた（写真 2-5）。
- 捕獲個体は、国立公園内の道路沿線など人目につく場所で繰り返し目撃されており、今年に入り当該親子グマと思われるヒグマの目撃情報が 30 件以上寄せられていた（道路沿線での最後の目撃は 8 月 8 日）。
- なお、8 月 10 日には羅臼岳の登山道付近で当該親子グマと思われるヒグマの目撃情報が登山者より寄せられている³。
- また、「人を避けない。人に出会ってもすぐに逃走しない。」といった行動段階 1 から 1+ に該当する行動⁴が度々確認されており、これらの行動を抑止するため、捕獲個体への追い払い対応（忌避学習付け）を繰り返し行ってきた経過がある⁵。
- 捕獲個体に関して、餌付けされたかのような情報が一部で出回っているが、そのような事実は確認されていない。なお、7 月 29 日に岩尾別地区でヒグマへの餌やりが疑われる事案が発生⁶しているが、目撃された個体の特徴から、捕獲個体との関係性は低いとの調査結果を得ている。
- 一部報道において当該個体の愛称に関する記事があるが、知床財団および行政機関がそのような愛称・呼称を用いた事実はない。



写真 2-5 岩尾別地区で目撃された捕獲個体。7 月 27 日知床財団撮影。

³ 道路沿いなどの低標高で活動するヒグマが夏季に山岳地域に移動することは一般的な行動。

⁴ 知床半島ヒグマ管理計画に基づくヒグマの行動段階の区分による。

⁵ 「人を避けない。人に出会ってもすぐに逃走しない」ヒグマは知床半島全域で多数確認されており、捕獲個体の際立った特徴とはいえない。

⁶ 7 月 30 日 Web サイト「知床のひぐま」および SNS において発出。

<https://brownbear.shiretoko.or.jp/news/news-1246.html>

2.4 事故発生以前に確認された要注意事例とその対応

2.4.1 今年度の岩尾別コースにおける要注意事例

登山道でのヒグマ目撃情報は例年多数寄せられており、今年度の目撃情報の件数は平年並の水準だった（7月末時点で24件）。今年度の岩尾別コースにおけるヒグマ目撃情報について、特に注意が必要と考えられる事例を表2-2に整理した。

表 2-2 岩尾別コースにおける要注意事例一覧

整理番号	日時	概要
1	7/21 9:00	560m 岩峰付近、単独亜成獣サイズ。登山道上でヒグマと遭遇。遭遇距離約 5m。詳細な遭遇状況不明。
2	8/3 14:00	登山口～弥三吉水間。単独成獣サイズ。登山道上でヒグマと遭遇。遭遇距離約 2m。移動していたクマが目撃者についてきた。その後ゆっくり離れていった。
3	8/10 13:00	岩尾別コースの 銀冷水(1,040m)～大沢(1,120 m)間の登山道上で0歳の子グマ2頭を連れた親子グマが目撃される。この親子グマは利用者を気にせず登山道を登ってきたため、登山者(別パーティのガイド含む)がクマスプレーを構えて後退する事態となった(スプレー噴射なし)。提供写真の外見上の特徴から、この親子グマは今回の捕獲個体と同一である可能性が高いと推察される。加えて、同様の目撃アンケート5件が同日中に複数パーティから上げられた。
4	8/12 8:30	弥三吉水間(780m)～銀冷水(1,040m)の登山道上で単独の成獣サイズのヒグマ(外見特徴:濃茶色、体毛長め)が下山中の登山者によって目撃された。目撃者に接近したことからクマスプレーが使用されているが、使用量は微量である。この個体は目撃者から一時離れたものの、遭遇から退避まで約5分間にわたって接近と離反を繰り返す行動を見せた。後日、目撃者から「報道で見た8月10日に羅臼岳で目撃されたヒグマの特徴と似ていた」との情報提供があった。

2.4.2 要注意事例への対応状況

- 8月10日、8月12日の要注意事例の発生に際しては、通報者からの聞き取り調査を行うなど、詳細把握に努めた。
- これらの情報は、知床財団から関係機関に共有し、今後の登山道の利用について協議を行い、ヒグマ管理計画に基づき登山者への注意喚起を行うことを確認した。
- webサイトとSNSで注意情報を発出するとともに⁷、8月12日午後には登山口に「要注意ヒグマ目撃情報」を示す注意喚起看板（図2-6）を掲示した。
- より詳細な情報を把握し、追加的な対策の必要性を確認するため、8月13日に環境省職員、斜里町職員、知床財団職員が合同で登山道のパトロールを実施し、登山者への聞き取りも行ったが、危険事案に関連する情報は得られなかった。

⁷ 8月12日 Webサイト「知床のひぐま」およびSNSにおいて発出。
<https://brownbear.shiretoko.or.jp/news/news-1261.html>

要注意ヒグマに警戒(Bear Alert!)

2025年8月12日午前8:30頃、羅臼岳登山道(弥三吉水～銀冷水間)で、登山者がヒグマと至近距離で遭遇する事例が発生しました。登山者はクマ撃退スプレーを噴射しましたが、その後も数分間ヒグマに付きまとわれました。7月以降、このように人を忌避しないヒグマが度々目撃されています。

○入山の際は・・・

- ・クマ撃退スプレーの携行を強く推奨します。

スプレーは知床自然センター・知床羅臼ビジターセンター・木下小屋でレンタル(有料)できます。

- ・周囲の状況に十分に注意し、ヒグマとの至近距離での遭遇を避けるため、見通しの悪い場所では音出しをして自分の存在をアピールしてください。
- ・至近距離でヒグマと遭遇した際には、ヒグマを刺激せず、後ずさるなどして距離を確保してください。



It's happened the dangerous case of a bear approaching and stalking to a hiker at Mt. Rausu on August 12. Highly recommended to bring a bear deterrent spray for your safety. You can rent it at Shiretoko Nature Center, Rausu Visitor Center and Kinoshita Hut.

*ヒグマに関する情報はすぐにご連絡下さい。(知床財団：0152-24-2775)

環境省 林野庁 斜里町 知床財団

図 2-6 8月12日に登山口に掲示した警戒情報の内容。

2.5 登山道等を対象とした情報提供・管理活動の実施状況

2.5.1 日常的なヒグマ情報の発信

- 登山道を含めたヒグマの目撃情報、注意喚起情報、基本的な対処法については、知床でのヒグマ情報を発信するwebサイト(知床のひぐま⁸)や同サイトと連動したSNS⁹等で継続的に発信している。
- 知床自然センター等の国立公園内のビジターセンター、岩尾別登山道の入口にある木下小屋などでは主に登山者を対象としてクマスプレーのレンタルを実施しており、レンタルにあたっては、使用方法やヒグマ対処法のレクチャーを併せて行っている。
- 岩尾別コースの登山口においては、登山道沿線でのヒグマ目撃情報を登山者から収集しているほか、収集した目撃情報を登山口の地図上に掲示する取組みを2016年ごろから継続的に実施している(写真2-6)¹⁰。

⁸ <https://brownbear.shiretoko.or.jp/>

⁹ Facebook(知床財団ヒグマ対策), X(@bear_shiretoko), Instagram(bear_safety_shiretoko)などの媒体を用いている。

¹⁰ 登山道における目撃情報の多くは、登山者自身の任意による情報提供に基づくものである。2次情報のケースもあり、詳細が不明であったり、目撃者が特定されない場合も多い。また、事象の把握には数日のタイムラグが発生することが多い。



写真 2-6 登山口(岩尾別コース)におけるヒグマ出没情報の掲示(9/3 撮影)。

2.5.2 要注意情報の調査と発信

- 警戒・注意の必要な事象が発生した際には現地調査や聞き取り調査を行い、上記 web サイト等で警戒をよびかける情報を発信している。

2.5.3 登山道の閉鎖等の事例

- 過去にヒグマを理由として岩尾別コースを計画的に閉鎖（入山禁止）とした記録は確認できない。
- 関連する事例として、2010 年 8 月 22 日に岩尾別コースの標高 1,000m 地点の登山道上でヒグマがエゾシカを捕殺する事象が発生し、調査のため 11:40～14:00 に登山道を一時的に閉鎖した記録がある。その後、8 月 25 日の通報で、ヒグマは登山道直近の林内で捕獲したエゾシカを摂食していることが判明し、現地調査の結果 8 月 26 日から 9 月 2 日まで岩尾別コースの利用自粛を呼びかけている。

3 参考資料(基礎的情報)

3.1 羅臼岳と登山道の概要

羅臼岳は知床半島の脊梁山脈である知床連山の最高峰で標高は1,661mである。山麓・山腹部は針広混交林が分布し、標高700m前後からはダケカンバ林、標高1,200m前後からはハイマツ低木林となる。遅くまで雪溪の残る場所には雪田群落が分布している。深田久弥による日本百名山にも掲載されており、知名度や人気も高い。

羅臼岳に至る登山コースは斜里町の岩尾別温泉登山口を起点とした「岩尾別コース」と羅臼町の羅臼温泉登山口を起点とした「羅臼温泉コース」の2コースがあり、両コースは羅臼平で合流し羅臼岳山頂に至る。また、羅臼平からは知床連山の縦走路があり、縦走路は硫黄山登山口を起点とした「硫黄山コース」に接続している(図3-1)。多くは日帰り登山だが、縦走登山などでは幕営による宿泊利用もされている。

岩尾別コースの標高差は 1,429m であり、往復の歩行距離は 13.8km である。標準的な登山時間は、登りを 5 時間、下りを 4 時間程度とする案内が多い（休憩時間を除く）。登山口となる岩尾別温泉には、ホテル（今年度は休業）と有人の山小屋がある。



図 3-1. 知床連山地区の登山道概念図。ベース地区は国土地理地図を用いた。

3.2 利用の現況

本件事故が発生した岩尾別コースは、登山道の整備状況も比較的良好であり、最も短い所要時間で羅臼岳の山頂に至ることができるため、知床地域の山岳の中では最も登山者の多い登山コースである。同コースの年間の登山者数はおよそ 5,000 人弱と推定（2015 年-2024 年の平均値）されており、知床連山の入山者数の約 8 割を占めている（図 4-2）。登山シーズンは 7 月から 9 月のおよそ 3 ヶ月間である。

なお、斜里町の観光客入込数は年間 100 万人弱（2024 年度実績、コロナ禍前は 120 万人程度）とされており、観光客数に占める登山者の割合は 1%に満たないと推定される。

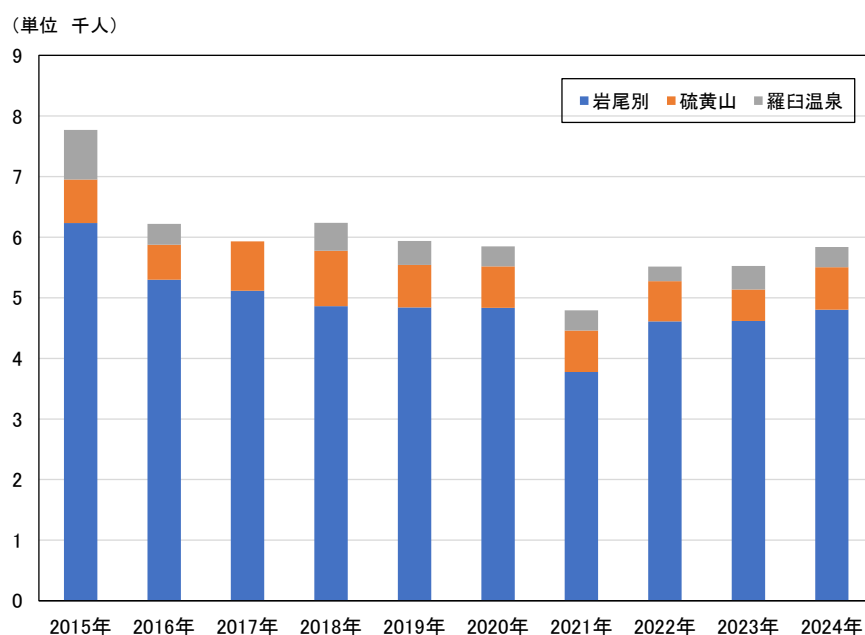


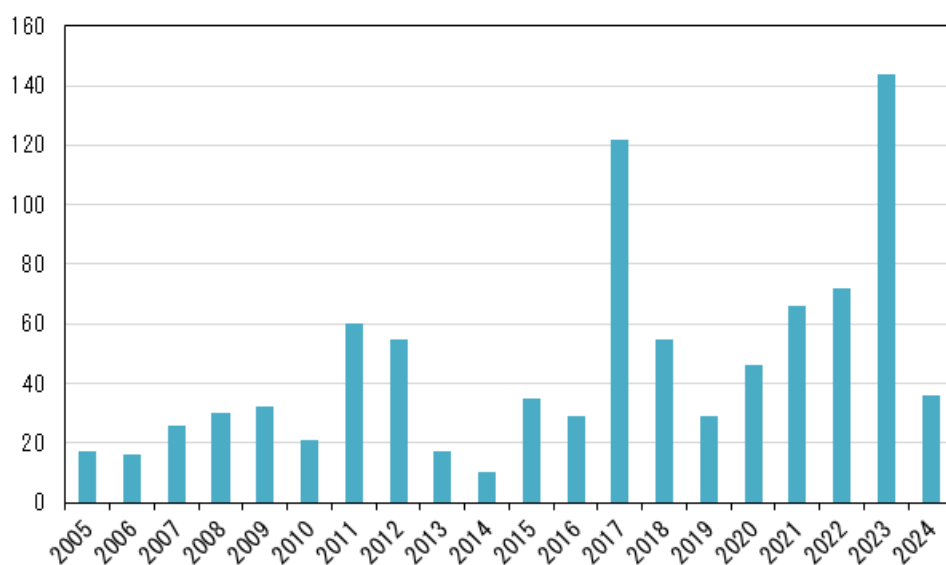
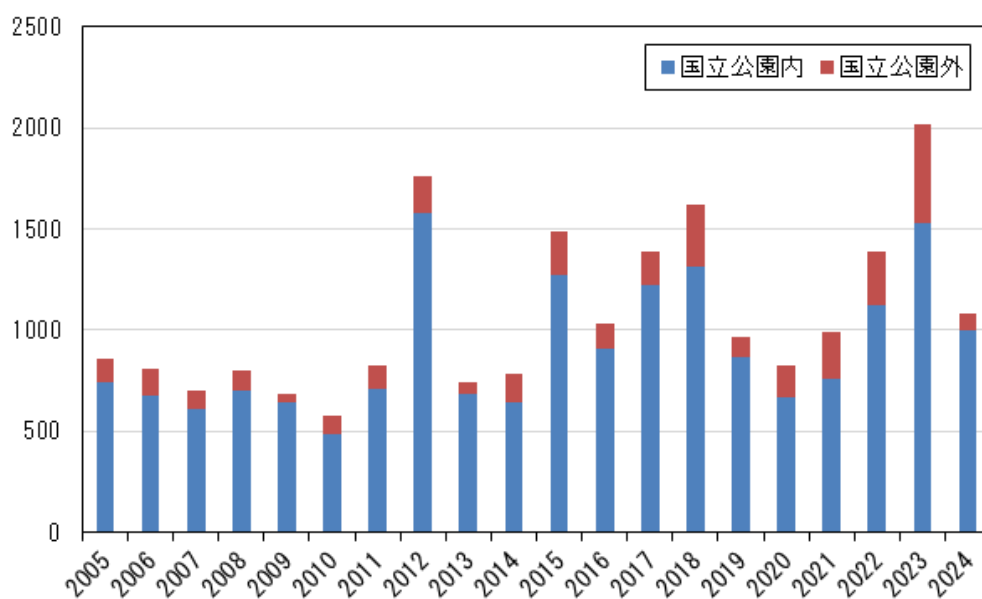
図 3-2 岩尾別、硫黄山、羅臼温泉登山口の利用者数の年推移。国立公園利用状況調査(環境省)による。

3.3 ヒグマの現況

3.3.1 ヒグマの目撃件数

知床半島は全域がヒグマの生息地であり、その目撃件数は北海道内でも突出して多い。年変動が大きいものの、近年の斜里町におけるヒグマの目撃件数は 1,000 件を超えることが常態化しており（2015 年～2024 年の平均目撃件数は 1,253 件）、大量出没のあった 2023 年においては 2,000 件を超過した（図 4-3）。また、通報を受けて出動する現場対応の件数も多い年では 1,000 件を超えている。

斜里町内でのヒグマ目撃のおよそ 7 割～8 割が国立公園内での目撃である。地区別に検討すると、登山利用が主となる知床連山地区での目撃件数は年間 10 件～140 件と年変動が大きいものの、斜里町全体の目撃件数に占める割合は 10%以下である（図 4-4）。ただしこれは、登山シーズンが限定的であること、一般観光客数と比較して登山者数は僅少であること、通報される目撃情報が一部に留まることに留意する必要がある。



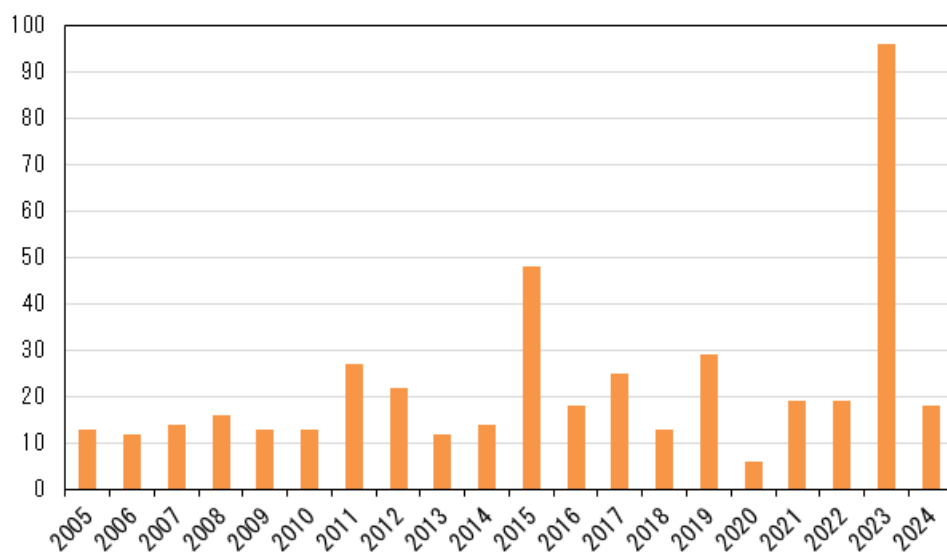


図 3-5 斜里町側におけるヒグマの人為的死亡数の年推移。斜里町ヒグマ対策業務報告書による。

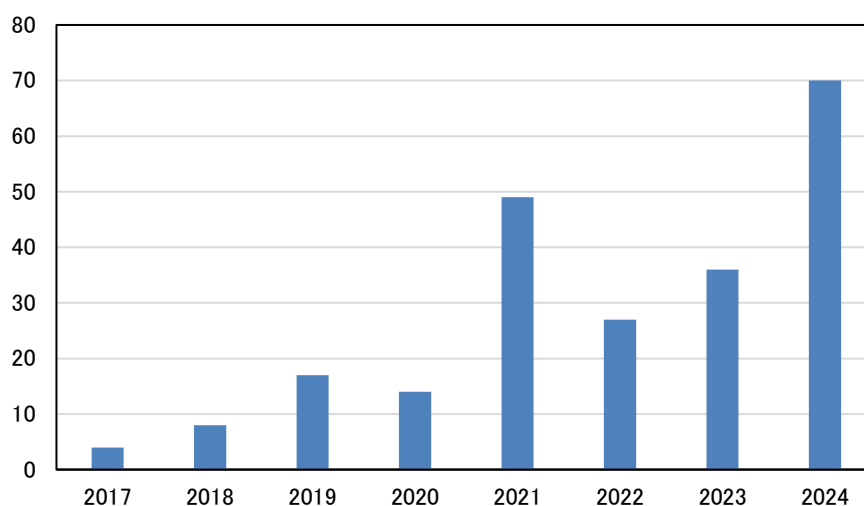


図 3-6 観光等利用者の問題行動に起因する危険事例の発生件数。ヒグマ対策連絡会議資料による。

3.3.3 過去の人身事故の発生状況

知床半島全体（斜里町・羅臼町）でみると、2017 年以降、ヒグマによる人身事故は 4 件発生している（本件事故を除く）。いずれもヒグマ等の捕獲従事者が受傷した事故である。死亡事故は 1974 年（斜里町）と 1985 年（羅臼町）にそれぞれ 1 件記録されているが、いずれもヒグマの捕獲中にハンターが襲われた事例である。一般の公園利用者の死亡事故は、記録のある限り本件事故が初めてとなる。

3.4 管理の現況

3.4.1 知床半島(知床連山一帯)の管理体制

国有林野

知床連山一帯は国有林野として林野庁北海道森林管理局により土地の管理がなされている。また、岩尾別コースは保護林(知床森林生態系保護地域 保存地区)に指定されており、「原則として人手を加えずに自然の推移に委ねる」地域と位置づけられ保護が図られている。

国立公園

知床連山一帯は知床国立公園(自然公園法に基づく)に指定されており、環境省釧路自然環境事務所が公園管理事務を所管している。岩尾別コースは公園計画において歩道(羅臼岳登山道線)の一部に位置づけられており、当該歩道の斜里町側は環境省が登山道の維持管理や修繕等を担当している。また、周辺は特別地域ならびに特別保護地区に位置づけられており、動植物の採取等の行為が規制され保護が図られている。

3.4.2 ヒグマの保護管理

国指定知床鳥獣保護区

知床連山一帯は国指定知床鳥獣保護区(鳥獣保護管理法に基づく)に指定されており、環境省釧路自然環境事務所がその運用を担当している。狩猟が禁止されているほか、鳥獣の生息・繁殖の場として保護が図られている。

3.4.3 協議および連絡調整の体制

知床世界自然遺産地域 科学委員会

知床世界自然遺産地域の自然環境を把握し、科学的なデータに基づいた管理を行うために必要な助言を得るために、学識経験者や行政機関を構成員として設置されている。個別課題への対応を協議するワーキンググループ(以下、WGとする)が設置されており、本件事故はヒグマWGと適正利用・エコツーリズムWGとの関連性が高い。

知床ヒグマ対策連絡会議

「知床世界自然遺産 地域連絡会議」の部会に位置づけられ、「知床半島ヒグマ管理計画」に基づき、知床のヒグマ対策の推進やモニタリング等の実施を目的として設置されている。

適正利用・エコツーリズム検討会議

世界遺産地域の適正な利用のあり方を検討することを目的として地域関係団体、学識経験者、行政機関を構成員とする「適正利用・エコツーリズム検討会議」が設置されている。

知床世界遺産施設等運営協議会

世界遺産地域の施設等の管理運営や情報提供、ルールの普及等を協力して行うことを目的として関係行政機関と地域団体を構成員とする「知床世界遺産施設等運営協議会」が設置されており、年1回程度の総会が行われている。また、同協議会の部会として「羅臼岳登山道維持管理部会」が設置されており、羅臼岳登山道の維持管理に関わる連絡調整や情報共有

の場となっている。

3.4.4 関連する計画やルール等

知床世界自然遺産管理計画

知床の世界自然遺産としての価値をより良い形で後世に引き継いでいくに当たり、極めて多様かつ特異な価値を有する遺産地域の自然環境を将来にわたり適正に保全・管理していくことを目的として策定された計画である。ヒグマについては、知床半島ヒグマ管理計画に基づき保護管理を行うこととしている。

第2期知床半島ヒグマ管理計画（2022年策定、2025年一部修正）

知床半島における住民生活や産業の保護、利用者の安全と良質な自然体験の場の確保、ヒグマの生態と個体群の持続的な維持の3点を目的として策定された計画である。斜里町、羅臼町及び標津町を対象地域とし、対象地域をゾーニングするとともに、ヒグマの行動段階を規定し、各ゾーンの特性や出没個体の有害性に応じた対策を行うこととしている。羅臼岳登山道はゾーン2に含まれている。ゾーン2における管理方策を表4-1に示す。

知床国立公園管理計画（2023年改定）

知床国立公園の管理方針や許認可基準等についてまとめられている。登山道の管理方針として、利用施設の整備は必要最低限とし、安全対策としては、ルールの周知や情報提供に努めるものとしている。また、岩尾別コースは、登山経験があり必要な装備や行動等についての判断ができる中級以上の登山者が自らの経験・技術に応じて利用することが想定されている。

知床半島中央部地区利用の心得（2009年策定）

知床連山を含む「知床半島中央地区」における利用のルールやマナーを定めたもの。「ヒグマに象徴される知床の自然に「謙虚さ」と「畏怖・畏敬の念」をもって接することを基本理念とし、3つの柱と10の約束を定めている。登山利用に関しては、自己判断と自己責任を原則とし、①事前の計画と準備を万全に ②ヒグマ対策を万全に ③植生等の保護に配慮した行動を ④尿尿やゴミの処理を適切に ⑤火の扱いに注意するの5点を追加的なルールとして定めている。

表 3-1 知床半島ヒグマ管理計画によるゾーン2（人身・経済リスク:低 クマへの許容度:大 利用者責任:大）の管理方策

第2期知床半島ヒグマ管理計画 p19 より抜粋、一部改変。

該当地域とその特性	基本的な考え方と対策		出没した個体の行動段階ごとの対応内容				
			0	1		2 (問題個体)	3 (問題個体)
				+	行動改善なし (問題個体)		
定住者が少数存在するか、少数の番屋がある遺産地域。もしくは、自己責任での利用が基本となる登山、トレッキング、カヤッキング等の利用者や自然ガイドによるツアー等の参加者が一定程度訪れる遺産地域。 定住者は存在しないが、事業所がわずかに存在する隣接地域の山林・山岳地域。低標高の山林の一部では林業等が行われている。登山、山菜・キノコ採り等の利用者や狩猟者が季節的に少数訪れる。	対ヒグマ	ヒグマの重要な生息地であるが、番屋における被害防止や利用者、事業者の安全確保のために、ヒグマに対する必要最小限の人為的介入を実施する。また、必要に応じて誘引物除去や追い払いを実施する。	経過観察	経過観察。必要に応じて追い払いを実施。	番屋周辺では必要に応じて捕獲。	基本的に捕獲。可能であれば追い払いを実施。	捕獲。
	対人間	番屋や事業者への普及啓発や情報提供を行い、食料・ゴミ等の管理の徹底を求めるとともに、電気柵等による防衛策の普及を図る。 利用者への普及啓発や情報提供を行い、ゴミや食糧の管理、クマスプレーやフードコンテナの携行等の安全対策等の履行を徹底させる。		情報提供。必要に応じて仮設電気柵による被害の防止。 必要に応じて利用自粛と注意喚起。		情報提供。必要に応じて仮設電気柵による被害の防止。 必要に応じて利用の自粛、歩道等の閉鎖と注意喚起。	情報提供と安全誘導。 利用自粛と注意喚起。